明治大学外国人研究者招聘制度　報告書

＜招聘教授・研究員の情報 / Guest Professor・Guest Scholar＞

氏　名 Name	金大凡
所属機関(派遣元) Affiliation (Home Organization)	亜洲大学文化コンテンツ学科
現在の職名 Position	非常勤講師
招聘期間（日本への入国日から出国日） Invitation Period (from the date of entry to departure)	2024年9月1日～2025年8月31日
専攻 Field of Research	韓国文学
ホスト教員氏名と所属学部研究科等 Name of host teacher and affiliation at Meiji University	牧野淳司　文学部

＜外国人研究者からの報告 / Foreign Researcher Report＞

①研究課題　/　Research Theme

20世紀日本の舞台芸術における『春香伝』の受容とコンテンツ的変容・拡張に関する研究

②研究概要　/　Outline of Research

本研究は、韓国を代表する古典小説『春香伝』が20世紀の日本においてどのように受容され、舞台芸術として変容していったのかを実証的に調査し、その系譜を明らかにすることによって、日本における「春香伝コンテンツ」の形成および拡張の様相を考察することを目的とする。

『春香伝』は、朝鮮時代以来広く親しまれてきた代表的な恋愛物語であり、韓国ではすでに多様なジャンルへと翻案されてきた。しかし、日本の舞台芸術において本作品がいかに翻案・上演されてきたかについては、体系的な研究が十分とはいえないのが現状である。

本研究では、国立国会図書館、明治大学図書館、早稲田大学演劇博物館、Yahoo!オークションなどを活用し、公演パンフレット、チケット、台本、新聞広告、舞台写真、劇評など、多岐にわたる一次資料を収集した。これらの資料は、公演年度、劇団、ジャンル、演出家、舞台構成要素などに基づいて分類・整理され、日本語原文に基づく韓国語訳および解釈作業も併せて行った。

資料の分析からは、『春香伝』が①1930年代後半、②1940年代、③1970年代、④1980年代、⑤1990年代の5つの時期にわたって、新劇・新派歌劇・オペラ・ミュージカル・音楽劇など多様なジャンルへと翻案され、舞台化されてきたことが確認された。

● 主要な分析対象は以下の通りである。
① 新協劇団<朝鮮古譚 春香伝>(1938年)
② 劇団芸術座<春香女伝>(1941年)、劇団文化座<春香伝>(1947年)、歌劇『春香』上演後援会<グランド・オペラ春香>(1948年)
③ 劇団文化座<春香伝>(1972年)、コマ・プロダクション<世界の愛の物語 春香伝>(1973・1974年)
④ 劇団ホーリーホック・アカデミー<ミュージカル春香伝>(1981年)
⑤ 劇団俳優館<音楽劇 春香伝伝>(1997・1999年)

各公演においては、演出家(村山知義、松浦竹夫、藤田朝也など)の演出意図と時代背景に応じて、「春香」と「夢龍」の関係設定や物語の展開、そして朝鮮という空間の再現方法が大きく異なっていた。民衆物語としての感情的表現の強調、脱植民地主義的な視点の導入、日本的様式美の応用などが舞台演出と結びつき、『春香伝』の独自の再解釈が行われた。

さらに、同一の古典物語が時代・ジャンル・創作主体によってどのようにコンテンツとして再物語化(narrative retelling)され、日本社会の文化的文脈と呼応しながら変容していったのかについても、実証的に追跡した。物語構造だけでなく、「春香」と「夢龍」のキャラクター造形、性別・年齢・感情表現の違い、「朝鮮」という空間の日本的演出などには、当時の日本社会の文化的感受性や他者認識が色濃く反映されていた。とりわけ「春香」のキャラクター変奏は、日本社会における理想化された女性像や感情規範、異文化イメージの形成とも深く関係していた。

本研究は、こうした分析を通じて、『春香伝』が日本の舞台芸術においていかに文化的に翻訳され、創造的に再物語化されてきたかを系譜的に整理し、公演史の空白を補完する実証的基盤を提示することを目指した。

今後、これらの舞台コンテンツは単なる古典翻案の枠にとどまらず、現代のコンテンツ産業においても活用可能なストーリーテリング資源として機能しうる。日本における『春香伝』受容史そのものが、東アジア古典コンテンツの国際的流通および再創造の動向を示す重要な事例となりうると考えられる。

③招聘期間中の研究活動の実績　/　The research results as Guest Professor・Guest Scholar

1. 学術誌論文の掲載 ： 2025年6月30日
論文「20世紀日本公演界における『春香伝コンテンツ』系譜の復元的研究」が、韓国の学術誌『洌上古典研究』(KCI 登載誌)に掲載された。本論文は、1938年から1999年までに日本で上演された『春香伝』の翻案作品を対象に、ジャンル(新劇・オペラ・ミュージカル・音楽劇)ごとの変容の様相を系譜的に分析し、日韓古典コンテンツにおける文化的翻訳と再物語化の比較研究の枠組みを提示したものである。
2. 公開講演 ： 2025年7月12日
明治大学文学部の学部生を対象に、公開講演「韓流以前、日本人が愛した“春香”がいた ― 20世紀日本公演界が生み出した『春香伝コンテンツ』の系譜」 を実施した。
日本における『春香伝』受容の主要人物(半井桃水、村山知義など)を中心に、古典が日本で現代コンテンツへと変容していく過程を紹介し、東アジアにおける文化交流の実践的な事例として説明した。
3. 日本コンテンツ基盤の共同研究および資料調査 ： 2024年9月～2025年7月
日本の伝統文化を基盤としたコンテンツの現代的活用に関する長期的な共同研究を実施した。舞妓文化、浮世絵、温泉・銭湯文化などの伝統的要素が、現代の日本コンテンツにおいていかに感情的・物語的に再構築されているのかを実証的に分析した。
4. 国内外の学術大会での発表 ： 2025年6月21日
韓国・文化コンテンツ学連合学術大会にて、以下の研究発表を行った。
「Netflixドラマ『舞妓さんちのまかないさん』(2023)の物語戦略分析」
舞妓文化と伝統的な食文化が、感情中心のミニプロット構造を通じてどのように物語化されているかを明らかにし、ケアと共同体の情緒的価値を具現化する具体的なコンテンツ戦略としての機能を論じた。この発表論文は、人文コンテンツ学会誌(KCI 登載誌)に投稿予定である。
5. 論文の投稿
①日本の伝統絵画である浮世絵とデジタル技術の融合により実現された展覧会「動き出す浮世絵展」 を分析対象とした論文を、韓国コンテンツ学会の学術誌(KCI 登載誌)に投稿した。本論文では、浮世絵が感覚中心の没入型コンテンツとして再構成される過程を分析し、デジタル環境においても持続可能な感性資源として機能しうることを明らかにした。（2025年5月）
②日本首都圏に所在する3大学(明治大学・帝京大学・獨協大学)の大学生212名を対象とした実証調査に基づき、論文「日本の温泉・銭湯コンテンツにおける情緒的受容構造の分析 ― 日本Z世代の大学生を中心に」を、グローバル文化コンテンツ学会誌(KCI 登載誌)に投稿した。コンテンツに描かれた情緒的表現が受容者の情緒的態度に与える影響を、統計的に分析したものである。（2025年7月）